ふえき

時代を超えて変わらないもの

特集

助成先を訪ね歩く

82

公益財団法人 福武教育文化振興財団 機関誌「不易」

特集 助成先を訪ね歩く

福武教育文化振興財団は1986年設立後、1987年から教育文化の研究や調査、活動を支援する助成事業を行ってきました。中でも助成事業の柱となっている教育文化活動助成（公募助成）は、2023年度までに累計3610件、総額約7億4241万円の支援を行っています。

2021年度には、2008年度から2020年度に助成を受けられた団体・個人のみなさま（約1300団体・個人）を対象に、その後の活動の成果や効果をはじめ、財団が実施するフォローアップなどについてアンケート調査を実施しました。おかげさまで508件もの回答をいただきました。そのうち約70％の団体・個人が継続して活動を行っているとの回答がありました（2021年6月現在）。

では、どのように活動を継続しているのでしょうか。今年度は団体先を訪問し、その当時のことや現在のことなどを取材しています。ここでは、その一部を抜粋して紹介します。全文は、各ページにある二次元バーコードを読み込んで、andnサイトにアクセスしてご覧ください。

10 芳明っ子文庫

7 瀬戸内ブッククルーズ

4 作州絣保存会

1 NPO法人 倉敷町家トラスト

11 一般社団法人 松島分校美術館

8 NPO法人 備前プレーパークの会

5 NPO法人 あかね

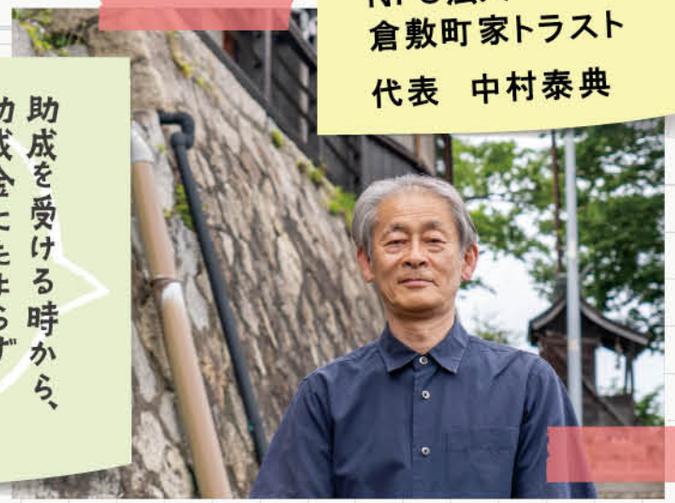
2 きび工房

9 玉野みなと芸術フェスタ

6 邑久高等学校 セトリー運営指導委員会

3 NPO法人 ENNOVA OKAYAMA

NPO法人
倉敷町家トラスト
代表　中村泰典



助成を受ける時から、助成金にたよらず自立して運営することを視野にいれていたのがよかったのかもしれません。

助成金は活動のスタートダッシュに

助成を受けたのは2008年度と2009年度でした。設立2年目だったので、活動を広く知っていただくための資金に充てたいと応募しました。助成金では、「くらしき手帖」という冊子を作りました。トラストの活動はもちろん、倉敷にあるおすすめの飲食店や施設を紹介した冊子です。

スタートダッシュの時期にいい助成を受けたなと思います。くらしき手帖の最後のページに「『福武教育文化振興財団』の助成金により作成しております」と記載したら、社会的な信頼を得られまして。日常会話で「福武教育文化振興財団」や「助成金」のワードが語られていました。設立して2～3年でも、他団体と円滑に関係構築するきっかけになったと思います。

助成を受けるときから、助成金に頼らず自立して運営することを視野に入れていたのがよかったのかもしれません。倉敷市本町にある「御坂の家」は、私たちが町家再生第一号として修理・再生した、宿泊もできる町家です。御坂の家の運営を通して、私たちは収益を得る仕組みを作りました。今では町家調査の委託を受けるなど、少しずつ収益確保の幅も広がってきています。

トラスト16年目の今、私が感じているのは、伝統的建造物保存地区以外の町家が失われることへの危機感です。何かできることはないかと思っていたとき、ユネスコが勧告した「HUL（Historic Urban Landscape：歴史的都市環境）」を知りました。私たちが警鐘を鳴らしたい内容を、ユネスコが既に主張していたのです。今後はHULの視点を軸に、周辺の歴史的環境を維持発展させる取り組みを進める未来を担う学生とともに、倉敷の未来を考える場を作っていきたいと思います。

NPO法人 倉敷町家トラストのあゆみ

- 2006　倉敷町家トラスト設立。町家調査、町家再生開始
- 2008　文化活動助成
- 2009　文化活動助成
- 2013　全国町並みゼミ倉敷大会（事務局）
- 2014　備中町並みネットワーク設立、備中on町家de クラス（事務局）
- 2016　福武文化奨励賞受賞
- 2020　高梁市城下町地区歴史的建築物残存調査
- 2020　EUI連続シンポジウム
- 2021　井原市井原町商店街地区建築物残存調査

財団の助成で作成した「くらしき手帖」

きび工房
森光康恵
（きび工房「結」主宰）

申請書や報告書を書くことは、立ち止まって考え直すよい機会。言葉にすることで成長できたなと思います。

助成金はギフト

助成を受けたのは2011年度から2013年度の3カ年継続助成で、本の出版やグッズ制作、朗読会の実施などのために助成を受けました。きび工房「結」をオープンして数年経った頃で、色々な企画を一生懸命に行っていたときです。

総社に受け継がれる「温羅伝説」を、より知ってもらう機会を作りたいと思っていました。助成金では『鬼の涙』という絵本の出版や朗読会、鬼にまつわるグッズ制作などが実現。特に朗読会は総社だけでなく、岡山や倉敷、高梁でも開催できました。想像以上に活動が広がり、感謝しています。

ライフワークとなっている「聞き書き」活動

2014年、2019年、2021年度には備中「聞き書き」実行委員会で助成を受けました。今この瞬間しか残せないものを残すことができました。地域の歴史や人の思いなどは、時間が経てば経つほど忘れてしまうもの。総社や備中地域のことをよく知る方がご高齢になっている今は、なおさらです。今ではライフワークとなっている活動です。

福武教育文化振興財団の助成は、幅広い市民活動に助成してくださっています。特に、芸術・教育・文化活動のように、収益性が無く費用対効果がすぐ出ない活動にとっては、活動の節目に「応募してみよう」と思える制度があるのは、本当にありがたいです。

申請書や成果報告書を書いたことも良かったです。「何のために活動しているのか」を書く欄があり、立ち止まって考え直す機会をいただきました。過去を振り返り、今後どのような活動をしたいかを言葉にすることで、成長できたなと思います。

助成金は、ギフトですよね。次回は「聞き書き」が20周年の時に申請したいなと思っています。

きび工房のあゆみ

- 2002　きび工房設立
- 2010　カフェギャラリー きび工房「結」オープン
- 2011
- 2012
- 2013　文化活動助成 3カ年継続助成（きび工房）
- 2014　文化活動助成（聞き書き）
- 2019　教育文化活動助成（聞き書き）
- 2021　教育文化活動助成（聞き書き）

代表を交代しながら活動を継続

新しい「縁」をつなげるためのきっかけづくりの活動で2013年度に申請して、3カ年の継続助成を受けました。

申請した活動は、自分たちのまちを自分たちで考えるうえで、先輩たちにまちとの関わり方を学ぶための企画「希望のつくりかた」講座と旧内山下小学校を活用したくて始めた事業「マチノブンカサイ」です。「民間の僕たちだったら、旧内山下小学校をこう使います」というプレゼンテーションを、近隣住民の方や管理する行政職員の方々にイベントを通じて行いました。大変さもありつつ、自分たちの手で一からつくっていけるのはやりがいがありました。

企画ごとに資金を集めて事業を行っていたため、助成金の存在はありがたかったです。助成金額は最大でも30万円なので、「活動の一部でしかない」のがよかったと思います。助成金で賄えない活動資金をどうするか、自然と考えることになるので。

助成金額は最大でも30万円なので、「活動の一部でしかない」のがよかったと思います。助成金で賄えない活動資金をどうするか、自然と考えることになるので。

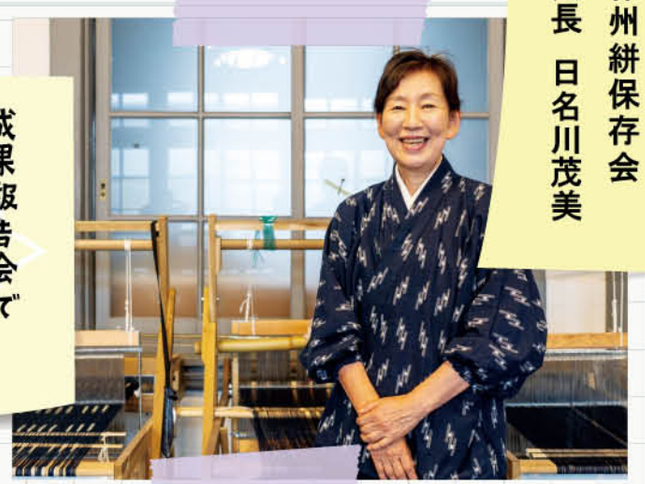
NPO法人
ENNOVA OKAYAMA
元代表　打谷直樹

NPO法人 ENNOVA OKAYAMA のあゆみ

- 2012　NPO法人 ENNOVA OKAYAMA 設立
- 2013
- 2014
- 2015　文化活動助成 3カ年継続助成
- 2016　烏城公園オープン カフェ社会実験「オリバープロジェクト」運営開始
- 2017　岡山市市民協働推進ニーズ調査事業受託 旧内山下小学校跡地を活用した社会実験企画運営業務委託事業受託
- 2019　石山公園活用検討会事務局就任

旧内山下小学校での「マチノブンカサイ」

作州絣保存会
会長　日名川茂美



成果報告会で私たちの活動を伝える機会を作ってくださるのがうれしいなと思います。

活動に自信を持つきっかけとなった助成金

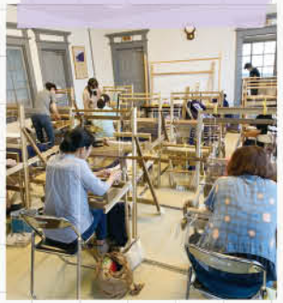
作州絣研究会のとき、お世話になった学芸員さんに福武教育文化振興財団の助成金を教えていただきました。はじめは「まだ助成をいただくような団体ではない」と思っていましたが、作州絣保存会になってから「今なら申請できるかもしれない」と思い応募しました。2013年度から2015年度、2019年度から今年度まで助成を受けて作州絣の継承を目的に、助成金を活用させていただいております。

助成だけではなくて、成果報告会で私たちの活動を伝える機会を作ってくださるのがうれしいなと思います。成果報告会に行くと、財団の方に「日名川さん、がんばっているね！」と声をかけていただけるのがうれしくて。悩み相談などもしつつ、毎回背中を押していただいています。

成果報告会への参加は、作州絣保存会の仲間が一致団結するきっかけにもなったんですよ。「あんな舞台に立たせていただけるなんて、私たちすごいね。がんばろうね」と。

また2015年度には福武文化奨励賞をいただき、再び財団の方から「作州絣保存会、がんばっているね！」と声をかけていただいて。私たちはがんばってこられたんです。顔を合わせて、声をかけていただける機会があったことが、私たちの活動に自信を持つきっかけになりました。

助成をいただいている期間に、織り人講座で後継者を育てながら、作州絣工芸館にて作州絣の手織り体験をしたり、販売したりしながら収益を得ていく仕組みを作りました。現在は7名を製造認定者とし、作州絣保存会の活動を一緒に行っています。



手織り作州絣養成講座

作州絣保存会のあゆみ

- 2012　岡山県郷土伝統的工芸品 手織作州絣製造
- 2012　後継者の認定を受ける 作州絣保存会設立
- 2012　作州絣織り人 養成講座開講
- 2013　文化活動助成 作州絣工芸館開館
- 2014　文化活動助成
- 2015　文化活動助成 福武文化奨励賞受賞
- 2019　教育文化活動助成
- 2020　教育文化活動助成
- 2021　教育文化活動助成 保存会独自の製造認定者制度設立
- 2022　教育文化活動助成
- 2023　教育文化活動助成

成果報告会で、今後に繋がる出会いが

フリースペースあかねに通っている児童・生徒に向けたイベントをしたくて、申請させていただきました。2017年度・2018年度に助成を受けています。助成金で実施させていただいたのは、野外活動でした。みんなでバスに乗ってフリースペースあかねを飛び出し、バーベキューをしたりレクリエーションをしたりしました。

2年目の2018年度は「今年は自分たちで企画してみよう」と、子どもたち中心で当日の計画を立ててもらったんです。とても楽しそうでしたし、子ども同士の団結力が強まるきっかけにもなりました。助成金をいただかないと開催できなかったと思うので、本当に感謝しています。開催できてよかったです。

成果報告会で発表の場をいただけたので、助成を受けてさらによかったなと思いました。発表後は多くの方に声をかけていただきました。他の助成団体さんは、報告書を書いて助成期間を終えるところが少なくないのではないでしょうか。福武教育文化振興財団さんから助成をいただくと、活動を後押ししてくださるだけでなく、地域で活動する方々と繋がるきっかけもいただけます。実際に、成果報告会から現在までお世話になっている方もいます。

福武教育文化振興財団には高校生が申請できる助成金があると伺ったので、高校生と助成金を申請して何かをやってみたいなとも思います。子どもたちから「これが買いたいんだけど、何とかならない？」と声がかかることがあって、「自分たちで助成金を申請してみる？」と提案してみても良いかなと思います。自分たちがやりたいことをやるために、資金繰りから行う。とてもいい学びになると思います。

NPO法人 あかね
代表理事　中山遼

2016年の法人化後は助成金に加えて、岡山市からの委託事業を行うようになりました。

NPO法人 あかねのあゆみ

- 2001　フリースペース あかね 設立
- 2016　法人化
- 2017　教育活動助成
- 2018　教育活動助成
- 2020　岡山市子どもの学習サポート事業を受託
- 2022　山陽新聞賞（社会部門）

「フリースペースあかね」の子どもたち

高校生の人生の選択肢を広げたい

資金の活用方法を細かく設定する助成先が多いなか、自由度が高くて大変助かっています。

邑久高等学校セトリー運営指導委員会
矢野祥子

邑久高校独自で実施している地域探究活動「セトリー」を始めて3年間は岡山県の予算で運営していましたが、4年目以降継続していくうえで、資金を集める必要がありました。生徒が会いたい人のところに会いに行くための交通費や、取り組みたいことを実現する活動費などに充てるため、教育文化活動助成を申請させていただきました。

セトリーは2年生になってから生徒自らテーマを決めているのですが、交通費などに充てる活動経費は年度が変わる前に用意しておく必要があります。テーマや取材先が決まっていない状態で助成金等を申請する場合、活動が進む中で新たな計画や活動が生じたときにも、対応できるようにしておく必要があります。

資金の活用方法を細かく設定する助成先が多いなか、自由度が高くて大変助かっています。2022年度は交通費を当初の予定ほど使わなかったので、費目間流用できるかどうか財団に相談して承諾をもらい、セトリーの紹介パンフレットをたくさん作成することができました。校外の方や地元の中学生に活動を紹介する際に非常に役立っています。

高校生が知っている世界はまだ狭いので、セトリーを通して自分が知らない世界を見たり、人の思いや生き方に出会ったりしながら、人生の選択肢や考え方の幅を広げてもらえたら嬉しいです。

仮にうまくいかないことがあったとしても、それも大切な経験ですよね。「もっとこうすればよかった」という思いを、今後の人生の糧にしてもらえたらと思います。

邑久高等学校セトリー運営指導委員会のあゆみ

- 2016 邑久高等学校セトリー運営指導委員会設立
- 2019 教育文化活動助成
- 2020 教育文化活動助成
- 2021 教育文化活動助成
- 2022 教育文化活動助成
- 2023 教育文化活動助成

ハンセン病学習ツアーの様子

助成を受けて、運営体制の礎を築く

2016年の「小さな春の本まつり」に、財団さんが来てくださったんです。「イベントをやっていくなら、うちの助成金を申請してみたら?」と勧めてくださったのがきっかけでした。

以前から助成金があることは知っていたのですが、正直申請が面倒だろうな…と思いました。とはいえ、せっかく声をかけていただいたので、思い切って応募してみたら2017年から3カ年継続でお世話になりました。

出店者にはボランティアで参加いただいていたのですが、助成金で交通費をお渡しすることができて、改めてお礼をお伝えする機会になりました。今も多くの方の協力があってイベントが続けられていると思うと、運営体制の礎を築けたのは、助成を受けていたからかもしれません。

瀬戸内ブッククルーズ実行委員会を立ち上げた翌年、イベントで岡山市と繋がり、ご縁あって補助金をいただくようになり、イベントは継続して開催できるようになりました。そのご縁で、ユネスコ創造都市ネットワーク登録に向けて機運を高めるためのイベント「おかやま文学フェスティバル2023」の実行委員長として携わることになりました。

2023年で活動は8年目になりますが、「出版社さんや本屋さんと話せるのが楽しい」という感想を、実際にいただけるようになったので、本の楽しみ方が分かるお客様が少しずつ増えているように思います。

これからも変わらず、本を介したコミュニケーションが取れる場をつくって、「この体験こそが、本の楽しみ方なんですよ」と伝えていきたいです。

おかやま文学フェスティバル2023

瀬戸内ブッククルーズ
実行委員会
代表　根木慶太郎

正直申請が面倒だろうな…と思いましたが、思い切って応募してみました。

瀬戸内ブッククルーズ実行委員会のあゆみ

- 2016 「イチョウ並木の本まつり」開催
- 2017 瀬戸内ブッククルーズ実行委員会発足・「小さな春の本まつり」開催
- 2018 文化活動助成 3カ年継続助成
- 2019 「イチョウ並木の本まつり」開催
- 2023 「おかやま文学フェスティバル2023」を実施

Jテラスカフェでのイチョウ並木の本まつり

NPO法人
備前プレーパークの会
代表理事　北口ひろみ（右）
副代表理事 北口政浩（左）

「多世代交流の場をつくりたい」という思いはずっとあったんだなとようやく気が付きました。

ニーズに出会うたび、応える挑戦を続ける

私たちが作る場所を、子どもやその親だけでなく、地域全体から愛される場所にしたいと思っていました。その思いを実現するイベントを開催したくて、助成を申請させていただきました。

初めて助成を受けた2016年は、「～幼老共生・自然共生・地域共生～食と文化でつながる『地域交流コミュニティカフェ』プロジェクト」と題して、食を通じて多世代交流の場づくりに挑戦しました。

その後、2018年には森っこえんの事業内で行った農園づくりのサポートを、2019年は里山整備、2021年には不登校の子どもたちの居場所づくり事業、2023年の今年は『みんなのおうち』をつくろう！」と題し、保育室と交流スペースとなる施設を子どもたちを交えながら作るプロジェクトを行っています。

その時に出合うニーズを聞いて「これは必要だな」と思ったらやってみることを大切にしています。でも新しいことへの挑戦は、資金がないとできない場合もあって。助成を受けることで、ニーズに応える挑戦をさせていただいています。

今後は「0歳から100歳までのプレーパーク」をコンセプトに、多世代交流施設にしていきたいと思っています。子どもだけでなく、大人もやってみたいことにチャレンジしたり、また地域の方々に関わってもらったりしながらみんなで子育てしていく場にしていきたいです。

これまでの活動を振り返った今、「多世代交流の場をつくりたい」という思いはずっとあったんだなと、ようやく気が付きました。今まで単発で少しずつ取り組んでいた事業が、「0歳から100歳までのプレーパーク」として一つになろうとしています。福武さんに支えていただきながら少しずつ形にしてきたことが、今後の指針をつくることに繋がりました。

NPO法人 備前プレーパークの会のあゆみ

- 2014　NPO法人格取得
- 2015　住友生命 未来を強くする子育てプロジェクト「奨励賞」
- 2016　教育活動助成
- 2017　森のようちえん「森っこえん」開園
- 2018　教育活動助成
- 2019　国際ソロプチミスト備前認証30周年記念事業「楷の木賞」　教育文化活動助成
- 2021　教育文化活動助成
- 2022　小規模保育園どんぐりえん開園
- 2023　教育文化活動助成

プレーパーク

活動を重ねる度に改善し、気付けば20年

玉野みなと芸術フェスタ実行委員会として活動を継続させるために申請しました。色々と助成を受けられるところを調べるなかで、福武教育文化振興財団の助成を見つけたんだと思います。

教育文化に特化した助成制度であり、私たちの活動理念に合致すると思い応募しました。2007年にスマイルネット玉情協として最初に助成を受けました。2009年には3カ年継続助成が始まり、2022年には玉野みなと芸術フェスタ実行委員会として助成を受け、20年を振り返る「TAMAFES 20年の歩み展」を開催できました。

現在は、玉野みなと芸術フェスタ実行委員会が母体としてあって、実際に活動しているのは各団体です。玉野しおさい狂言会、明神鼻（みょうじんばな）の小屋実行委員会、タマノクルーズ実行委員会、リボンの会、こども芸術アプローチ実行委員会があります。ホールディングスのようなイメージです。

活動を続ければ続けるほど、私たちの思いや取り組みが「点」から「面」に広がっていくのを感じています。財団さんにはいつも活動を支えていただき、本当に感謝しています。

玉野みなと芸術フェスタ実行委員会で実行委員長を務めてきた一つのモチベーションとして、玉野市が「文化で潤う芸術のまち」だと多くの人が思えるような場所になったらいいなと思っているんです。

現在は所属団体が増えていて、とても頼もしいなと思います。自分一人では、できることに限りがありますから。仮に私が実行委員長を退くときが来ても、活動を継続していって、今始めているたくさんの活動が花を咲かせていってくれたらと願っています。

玉野みなと芸術フェスタ実行委員会
実行委員長　斉藤章夫

活動を続ければ続けるほど、私たちの思いや取り組みが「点」から「面」に広がっていくのを感じています。

玉野みなと芸術フェスタ実行委員会のあゆみ

- 2009　文化活動助成
- 2010　3カ年継続助成
- 2011　（スマイルネット玉情協）
- 2019　教育文化活動助成
- 2023　教育文化活動助成

TAMAFES 20年の歩み展でギャラリートーク

芳明っ子文庫
岡村真美

これからも、やりたい人でやっていけたらいいのかなと思っています。

学校でも家庭でも経験できないことを

芳明っ子文庫は、芳明っ子フリースクールの一団体として2004年にスタートしました。芳明っ子文庫を通して、地域ぐるみで子育てするようなイベントを開催したいと思い申請させていただきました。2005年に助成を受けてから、新しい取り組みを始めるときに助成を申請しています。

学校でも家庭でもできないことを子どもたちに経験させてあげられているのは、今でもいいことだなと思います。

流しそうめんやスケート教室など体験活動を実施するためには、食材費や会場費などの費用がかかります。参加費を集めることもありますが、基本的に参加費はいただいていないので、助成金をイベント費用に充てています。大変ありがたいなと思っています。

芳明っ子文庫での体験が楽しかったのか、卒業しても手伝いに来てくれる人がいます。支えていただいた活動が、子どもたちにとっていい経験になっているんだなと。またこのように地域でのつながりができていくことを嬉しく思います。

今までの活動は結果として続けられています。メンバーや手伝ってくれる方々みんなそれぞれ仕事や家庭があるけど、それでも「やりたい」「手伝ってみようかな」と思ってくれる人がいるから続けられている。無理をしたら、この活動はできません。

私も「続けたい」という思い以前に、子どもたちが喜んでくれるから「次は何をやろうかな」という気持ちが湧いてくるんです。これからも、やりたい人でやっていけたらいいのかなと思っています。

子どもたちによる影絵の発表

芳明っ子文庫のあゆみ

- 2005 文化活動助成
- 2007 文化活動助成
- 2009 文化活動助成
- 2012 文化活動助成
- 2016 教育活動助成
- 2018 教育活動助成
- 2020 教育文化活動助成
- 2022 教育文化活動助成

助成金が活動継続のモチベーションに

助成を受けたのは、旧名であるクリエイターズラウンジとして活動をしていた頃。2013年度には吹上美術館再生プロジェクトを、2015年度～2017年度には吹上美術館でのイベントや、松島分校美術館の拠点づくりを支えていただきました。自分たちの転換期にお世話になった印象があります。

助成金は、活動を続けていこうと思えるモチベーションになりました。吹上美術館を運営しているときは資金繰りに悩んでいて、どうやって活動を続けていこうか考えてばかりいました。

助成を受けることで、財団側からは活動の継続性や社会的な成果を問われたり、自分たちは「助成金をいただいている以上、きちんと成果を残したい」という思いになったり。いい意味で活動を継続するプレッシャーをかけていただいたから、今があると思います。

アーティストインレジデンスの様子

今後の目標と言えるかは分かりませんが、松島分校美術館を安全で安心な場にする意識は大切にしていきたいと思います。

特に、子どもたちの団体に使っていただきたいですね。松島に来たらきっと、水鉄砲合戦をしたり、竹を切って釣竿を作ったりと自由な発想で楽しんでくれると思います。

自分たちが子どもたちに対して、「こういうことを学んでほしい」と決める必要はないと思うんです。子どもたち自身が色々なことに気づいて、楽しんでもらえたら。そして家に帰ったときに「釣竿作って遊んだの楽しかったな」などと思い出してもらえたら、松島分校美術館まで来てもらった意味が出てくるのかなと思っています。

一般社団法人 松島分校美術館
（旧名：クリエイターズラウンジ）
代表理事　片山康之

いい意味で活動を継続するプレッシャーをかけていただいたから、今があると思います。

一般社団法人 松島分校美術館のあゆみ

- 2011 クリエイターズラウンジ活動開始
- 2012 文化活動助成
- 2013 文化活動助成
- 2014 一般社団法人設立
- 2015 文化活動助成 吹上美術館スタート
- 2016 文化活動助成 福武文化奨励賞受賞（個人）
- 2017 文化活動助成
- 2019 松島分校美術館スタート

瀬戸内海に浮かぶ「松島」。島人口は１名

助成事業年間カレンダー

福武教育文化振興財団では、さまざまな団体の活動を知ったり、ネットワークをひろげたり、悩みを共有したりする場を1年を通してつくっています。助成を受けて活動している田辺綾子さんにそれぞれの時期のポイントをコメントしていただきました。

田辺 綾子さん
エディブル・エデュケーション岡山研究会

2020年設立。活動内容：持続可能なスタイルの食育菜園を教育に取り入れ、子どもたちへ領域横断型のアクティブ・ラーニングを提供。

申請理由
財団の存在は知っていた。いろんな方に活動を知っていただける機会にもなるし、この活動を客観視してもらうために申請してみた。申請書を書く前に、知人から「個別相談をしてみたら」とすすめられたので相談した。相談したことで緊張がほぐれ、素直に思いの丈を申請書へ書けばいいんだと思えた。

採択実績
2021年度から2023年度採択(2023年度3ヵ年継続助成)

4月
助成活動スタート！

財団からのメールや郵便は即対応しています。後回しにすると忘れちゃうので。マイページも早々に作成して必要書類を提出したら、気合いが入りました。1年間楽しく活動します。

4月
助成金振り込み

活動をスタートする前に助成金が振り込まれるので大変助かります。

4月
オリエンテーション「うったて」

いろんな活動があるんだなと感心しました。また、1年間どのように過ごしたら良いかイメージできました。

5月
機関誌「ふえき」発刊

内容もですが「ふえき」のデザインが素敵で毎号楽しみにしています。また同封されている助成先のイベントチラシを見て多彩な活動があることにもわくわくします。

6月
オンラインエリア別情報交換会

みなさん精力的に活動されていて元気をもらっています。参加後は、エディブル・エデュケーションという言葉を覚えていてくれた方がいたり、勤務先の学校に呼んでいただいて生徒さんと活動をしたり、いろいろな出会いがありました。ぜひ参加をおすすめします。特に若い人に。

7月
andF教室

日頃からインプットは積極的にしています。興味深いテーマのときには参加。講師の方のみならず参加者の方とも名刺交換したり、ネットワークが広がりました。

9月
成果報告会開催 成果報告書発刊

発表時間が短いので、まとめるのが難しかった。でも、活動を知っていただく良いチャンスでした。

9月
機関誌「ふえき」発刊

「私が、活動をはじめた理由」に掲載していただいたときはうれしかったです。まわりからも「載ってたね」って声をかけられました。

成果報告書提出

成果報告は活動終了後一1ヵ月以内に。領収書の管理が大変ですが期日までにきちっと提出するよう心掛けています。

3月
審査委員会結果通知

うれしかった半面プレッシャーも感じました。

10月

そろそろ次年度の活動についても考える時期。インターネットでどんな助成金や補助金があるか調べたりしています。

11月

個別相談で、いろいろと話しているうちにやりたいことが明確になってきた感じでした。

1月
機関誌「ふえき」発刊

助成活動とは関係ないけど、みなさんがどんな本を読んでいるのか、おすすめの本などの記事も読んでみたいです。

12月
募集開始

パソコンは苦手ではないので電子申請でも問題なかったです。下書き用のエクセルデータもあるので活用しました。

1月
募集〆切

〆切ギリギリの応募にならないように余裕を持って申請することを心がけています。

僕が、活動をはじめた理由

2017年3月に和気町内の4つの小学校が廃校となりました。少子化、人口減によるもので、時代の流れなのかもしれませんが、失ったのは学校だけでなく、地域の人たちとの交流の場でもあることに気づきました。そんな中、廃校となった自分の母校でもある旧和気小学校の活用についても考えを巡らせる中で、静岡県裾野市東地区おやじの会が取り組んでいる「何にもしない合宿」のことを知ったのです。

それは地域の大人たちが、子どもたちに自由に遊べる場を提供し、宿泊を伴う活動を通して、地域の子どもたちと大人たちの関係を築いていくものでした。今後の地域に必要なのは、この地域の宝物である子どもたちと、その地域の大人たちがより良い関係を築き、地域に愛着を持ってもらうことだと感じ、この「何にもしない合宿」を参考にし、地域の子どもが自由に遊び、普段会うことの少ない近隣の小学校の子どもたちや、地域の大人と交流し、その舞台として廃校を活用できれば、地域問題解決とまではいかないが、地域にとっては大きな意味があると考え、地域活動に興味のあるメンバーと共に、2019年より「旧和気小みんなで放課後合宿」という活動を始めました。

まだ色々と模索しながらの活動ではありますが、子どもたちの楽しむ姿や、学校に再び笑い声が響いている風景を見ると、嬉しく、継続していきたい活動だと感じています。

またIPU・環太平洋大学の学生もボランティアで毎回参加してくれ、地域のお兄さん、お姉さんという存在も子どもたちにとっては大きいと感じています。

新型コロナウイルスの影響もあり、宿泊を伴う合宿はここ数年開催できていませんが、そろそろその復活に向けて、実行委員、地域の大人たちと検討していきたいと思います。

廃校を活用し、「何もしない合宿」で交流

文・畠中要輔　旧和気小みんなで放課後合宿 代表

旧和気小みんなで放課後合宿実行委員

6年前に廃校となった小学校の校舎を活用して宿泊や日がえりのイベントを開催。廃校舎を活用し、大人と子どもが「日常の関係」の延長線上で交流できる場を設けることで、地域みんなで教育のできる環境を目指している。

全員で記念撮影

大学生と遊ぶ小学生たち

私が、活動をはじめた理由

どこで暮らそうか―各地に住み、改めて自分のなかの条件を挙げていきついたところは、祖父母の家でした。「ここで暮らしたい」と神代（こうじろ）へ移住した私。そこにあった「紙の館」の一角で、一人紙作りをしていた忠田町子さんに出会います。「こんなにまで手をかけて紙を作りたかったのか昔の人は」と驚愕するほどに、和紙づくりには細やかな手がかかります。人の手と植物と水。この3つから生まれるシンプルで美しい和紙の世界。その先人たちが編み出した技術が今ここ神代に生きている。直接学び引き継ぐことが出来るチャンスがある。その出合いの奇跡的なこと。

これは「今やるしかない！」そう思い、新見市所有の作業場や道具を使える環境を確保するために神代和紙保存会を発足しました。取り組むうちに、この楽しい紙漉きの世界を独り占めしているのはもったいないと思うように。そんな思いから、紙漉き技術の習得と併せてその魅力を伝える様々な企画に取り組んでいます。

なかでも力を入れているのはふたつ。ひとつは「かみさま夢風鈴」。風鈴とともに和紙の短冊を2000枚、藤棚の下に8月中飾るというもの。光を透かし風に揺れる短冊を通して植物の繊維から作る和紙の美しさや強さを伝えます。

もうひとつは地元の小学生に向けた「卒業証書漉き」。職人が作った本物の紙漉き道具を使い、神代に伝わる伝統技法で、世界で1枚の自分で漉いた卒業証書を作る。この時間がいつか誇りになったら良いな、そんな思いも込めながら取り組んでいます。〈和紙だからこそ〉の価値を探求しながら紙漉き技術を引き継いでいきたいと思います。

和紙づくりの技術を学べる奇跡を生かす

文・仲田 紗らさ　神代和紙保存会 代表

神代和紙保存会

約1000年前から漉かれている「神代和紙」。漉き手が80代一人のみとなっていた2016年、若い後継者を育て技術の継承、認知度向上に努めるため保存会を発足。神代和紙を使った「かみさま夢風鈴」のイベントや子ども自身による卒業証書を作る活動を行う。

かみさま夢風鈴

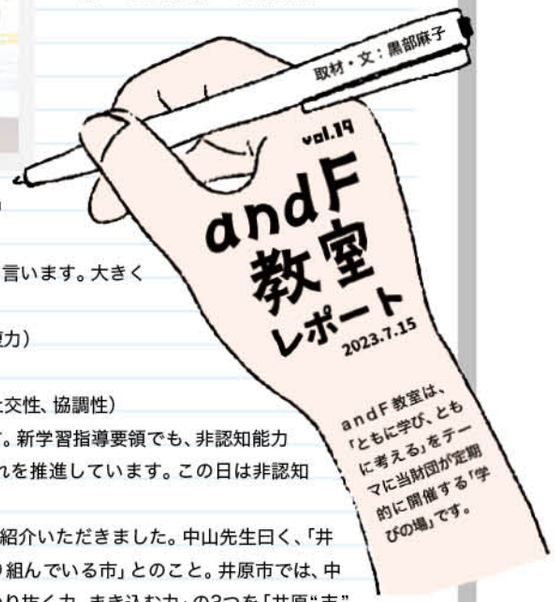
神代小学校卒業証書漉き

非認知能力の基本の「き」

講師プロフィール

中山 芳一
岡山大学教育推進機構　准教授

1976年岡山県生まれ。専門は教育方法学。大学生のためのキャリア教育に取り組むとともに、幼児から小中高学生の各世代の子どもたちが非認知的能力やメタ認知能力を向上できるよう尽力。『家庭、学校、職場で生かせる！自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ』『学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす』（ともに東京書籍）ほか著著多数。



今回のテーマは「非認知能力」です。この分野の第一人者である中山芳一先生をお招きし、じっくりお話を聞くことができました。

非認知能力とは、点数で評価できない力、「見えない学力」のことを言います。大きく3つに分類されます。

①がまん系の自分と向き合う力（自制心、忍耐力、レジリエンス＝回復力）
②やる気系の自分を高める力（意欲、向上心、自信、自尊感情、楽観性）
③つながり系の他者とつながる力（コミュニケーション力、共感性、社交性、協調性）

非認知能力が育つと、認知能力（勉強やスポーツ）も伸びていきます。新学習指導要領でも、非認知能力を育むことが盛り込まれました。岡山県では、「夢育（ゆめいく）」と名付けてこれを推進しています。この日は非認知能力育成の実践事例として、2つの取り組みが紹介されました。

まずは、井原市の取り組みを、井原市教育委員会の藤井剛さんから紹介いただきました。中山先生曰く、「井原市は僕が知る限り、県内の市町村でもっとも非認知能力育成に取り組んでいる市」とのこと。井原市では、中山先生の協力のもと、独自に非認知能力を集約・整理し、「いばら愛、やり抜く力、まき込む力」の3つを「井原“志”民力」と名付けました。学校と地域が連携・協働し、学校では学習や生活における目標設定や振り返りを行うことで非認知能力を養い、その力を、世代を超えた地域での交流やイベントにも役立てています。

次に、A.M.I学童保育センターの取り組みについて、中野健汰センター長が説明。同センターでは、子どもたちが自ら一日の計画を立てて振り返りをすることが大事にされており、独自の「ぱるノート」が使われています。また、半期ごとに子どもたちの育ちを保護者の方々と共有するための「學びアセスメントシート」も導入。みんなでルールを決め、プランを立て、放課後の時間を思いっきり遊ぶ中で非認知能力が育まれています。

この2つの事例から、非認知能力を伸ばすためには、何か特別な教育プログラムがあるというより、日々の授業や生活の中で、具体的な行動指標を意識し、評価や振り返りの機会をこまめにつくることが大事なのだと感じました。

そのほか中山先生から、非認知能力をのばすために「やってはいけない」子育ての紹介や、学校での教育実践のステップについても紹介されました。大事なのは、上からの押しつけではなく、子どもが自ら気づくこと。そのためには、子どもの姿を肯定的に捉えるための心の「レンズ」を持ち、ほめたりいろんな経験をさせたりして意識づけをしていくことが重要です。

中山先生の話の後、気づきや、感想を共有する参加者

シリーズ Face

取材・文　森分 志学

よく生きるって一体なんでしょうか。

直島、豊島、犬島を舞台に展開している「ベネッセアートサイト直島※」。公益財団法人福武財団の藤原さんは、昨今話題になっている対話型鑑賞など、アートを活用した教育企画を子どもから大人まで幅広く届けています。「大人になっても変わるきっかけをつくれるのなら、やるしかない。」と話す藤原さんのお仕事についてお伺いしました。

自分の「よく生きる」を見つける、アートと教育。

公益財団法人 福武財団
藤原 綾乃
Fujiwara ayano

1986年、岡山市生まれ。早稲田大学 理工学部 建築学科卒。2010年公益財団法人 福武財団に入職、ベネッセアートサイト直島で展開する美術施設の鑑賞プログラムに対話型鑑賞を導入。2018年よりエデュケーションを担当し、幼児からシニア層までを対象にした学びのコンテンツ開発や、ファシリテーター育成に従事。主に学校向け教育プログラムや組織内外の企業向け研修にて対話型鑑賞を活用し、美術作品の鑑賞を通じて自己や他者に気づく内省体験や社会課題について思考するプログラムを実践中。

公益財団法人 福武財団 **藤原綾乃**さん

藤原さんは早稲田大学理工学部建築学科を卒業後、他の場所にはない仕事として直島を選び、2010年に新卒で福武財団に入職。入職と同年に開館した李禹煥美術館に配属されます。開館当時、来館者が抽象的な現代アートに「どう見てよいか分からない」と戸惑ってしまう事態が発生していました。これに対して、藤原さんは従来のような作品解説ではなく、来館者がお互いの主観や見え方を共有する手法として、対話型鑑賞をいち早く取り入れました。

藤原さんがリーダーを務めるセクションでは対話型鑑賞だけでなく、様々な企画を年間70本ほど手掛けています。例えば、音の大きさを振動と光の強さに変換するアクセサリー型装置Ontenna（オンテナ）を使って、豊島中学校の生徒と香川県立ろう学校の小中高生の交流を富士通と共同で企画しました。交流の舞台は、豊島の美術施設の一つである心臓音のアーカイブ。世界中から収集した心臓音に合わせて電球が点滅するクリスチャン・ボルタンスキーの作品です。Ontennaを使った鑑賞によって、心臓音を耳だけではなく、振動と光ー触覚と視覚で感じるため、障がいの有無を超えたコミュニケーションを実現しました。他にも、中学生を対象に、自己理解を深め多様性に気づく体験をめざした鑑賞ワークショップ『14歳アートフェス』などを企画されています。

藤原さんが企画するワークショップはベネッセの企業理念「よく生きる」に通底していて、参加した人が「自分にとって『よく生きる』とは何か」が答えられるようになることをゴールにしています。「よく生きる」の答えはその人の主観から導き出されるものです。対話型鑑賞では、参加者の主観を引き出し、その答えが優劣なくすべて等しく扱われます。この点でアートは最適だそうです。最初は自分の思っていることを言語化できなかった人が、問いかけによって言葉を繰り出せるようになったり、気づきが生まれたりする瞬間がうれしいと話します。すぐ話せない人へのきっかけづくりとしては、「作品のどこを見ていたのですか？」という問いかけで、自分が見ていた対象を明確にしながら、言語化の手伝いをします。すると次第に、自分が考えていることを自分で認識できるようになり、主観を話せるようになるそうです。そうして様々な人の主観が混在する体験を通して、他人と自分の考えは違うということを体感として理解する参加者が多くいるといいます。

藤原さんの「よく生きる」は、無色透明になることだそうで、それは藤原さんのようなファシリテーターが不要になる世界。お互いの主観的な世界を共有しながら、ちがいを面白がれるコミュニケーションが当たり前になることを目指して、教育企画をゼロから生み出し続けます。

※ベネッセアートサイト直島　瀬戸内海の直島、豊島、犬島を舞台に株式会社ベネッセホールディングス、公益財団法人 福武財団が展開しているアート活動の総称

NPO法人だっぴ 代表理事
森分 志学 Moriwake Shigaku

1990年、岡山県倉敷市生まれ。大学院生時代に、高校生と大人の対話プログラムを高校と連携してつくる。卒業後は、教育系の広告代理店に勤務して、高大接続の領域に関わる。2017年に岡山にUターンしてNPO法人だっぴに入職し、2020年より現職。県内15市町村50校以上の学校や自治体の学校教育・社会教育に携わる。

今号の表紙画

画・文　タケシマ　レイコ

青い友達

皆さんはgoogle mapを使いますか？　mapには航空写真で見る機能がありますね。倉敷市小瀬戸で検索してみてください。ピンが打たれた場所の傍を流れるのは倉敷川。架かっているのは小瀬戸橋です。その橋の下辺り、ピンすぐ横の河川敷を拡大すると白い線で囲われている場所が見えるでしょうか？　面積にしておよそ10×50㎡。これはミズアオイの保護区です。かつて倉敷川や吉岡川の水面を覆うほど群生していたミズアオイ。しかし水路の改修や除草剤の使用によって生育環境が悪化。現在はこのわずかな面積の保護区と、域外保全が行われている岡山自然保護センターなどでしか見ることはできません。ミズアオイは絶滅危惧種ⅠB種、そして岡山県希少野生生物保護条例による指定希少野生動植物でもあります。

ハート型の葉の上に3㎝ほどの美しい青紫色の花を20個以上もつけるミズアオイ。川原や水田で青紫の花が群生して咲く様子は、どんなにか美しかったことでしょう。古来、染料や食用にもされており、万葉集には4首詠まれています。ずっと人々の暮らしを豊かに彩ってきた植物だったのです。身近な自然と共生する暮らしからかけ離れてしまった現代社会。日常的にミズアオイに接する機会がなくなったことは、それに伴う文化を失うことでもあります。そして美しい風景が心に与える潤いを思うと、大切な友を無くしてしまったのと同じような大きな損失と感じずにはいられません。

花期は8～10月。大切な友ミズアオイちゃんは、もしかしたらまだ倉敷川のどこかで懸命に生き延びているかもしれません。保護区以外の場所でミズアオイを見つけた方は、倉敷市立自然史博物館友の会にご一報ください。そして、友に会いに岡山自然保護センターにも出かけてみてください。

【取材協力・環境学習プラザ「アスエコ」山田哲弘 所長】

タケシマ レイコ　グラフィックデザイナー／イラストレーター　岡山市生まれ。女子美術大学卒。エディトリアルデザイナー羽良多平吉に師事。氏から「デザインと編集は、作り手の生活と直結している」ことを学ぶ。帰岡後独立。届けたいことを、届けたい相手に、心を込めて伝える贈り物のようなビジュアルコミュニケーションを目指し県内外で活動中。倉敷市立短期大学非常勤講師（2018年4月～）。

編集後記

◆この9月1日～ 4日の4日間、「2022年度オンライン成果報告会」を実施しました。これは2022年度の当財団助成先の方を中心に31団体・個人から、昨年度の活動の成果を発表していただくものです。延べ約200人の助成先からの参加を得て、大変盛況でした。コロナ禍の影響で、それまでのリアル開催、やむなくオンライン開催に切り替えての昨年まで3回の実施でしたが、遠方からも参加できる、移動時間がかからず参加しやすい、報告者の数が多いのでいろいろな活動成果を共有できる等のメリットも多く、今年度は9月30日の対面での成果報告会とW開催することとしました。各発表は、近々当財団HP経由で動画にてご視聴いただけるようになりますので、ぜひご覧ください。皆さん試行錯誤、工夫を凝らし、それぞれの活動を進めていらっしゃるのだなと、またその活動がどんどん地域に根付き、人づくり・地域づくりに確実につながっているのだと感じました。◆この4月着任後、今年度助成先の活動にできるだけ多く足を運ばせていただいていますが、コロナの影響も減ったこともあってか、より積極的な活動に展開をしているようにお見受けします。応募書類やHP等での活動概要は存じ上げていても、やはりリアルで活動に参加・見学させていただくと、その思いや熱意、活動の奥深さを肌で感じることができ、大変有意義な機会となっています。これからも財団スタッフができる限りお邪魔しますので、その際はよろしくお願いします。◆今年度スタートしておよそ半分が過ぎようとしています。早いものです。上期は、瀬戸内スタディツアーやand F教室などいろいろ取り組んでいます。WebやSNSで随時発信しておりますので、覗いてみてください。下期も、福武教育文化賞の贈賞やハロー！ミュージアム等大きな事業が目白押しです。ご注目ください。(S)

人づくり、地域づくりを応援します
公益財団法人 福武教育文化振興財団
FUKUTAKE EDUCATION AND CULTURE FOUNDATION

〒700-0806 岡山県岡山市北区広瀬町1番5号 株式会社ベネッセコーポレーション広瀬町社屋
TEL 086-221-5254　FAX 086-232-3190　URL https://www.fukutake.or.jp/
E-MAIL eczaidan@fukutake.or.jp

福武教育文化振興財団ウェブサイト　コミュニケーション・マガジン and F｜アンドエフ　教育文化活動助成成果報告書アーカイブ

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

機関誌 不易　vol.82　2023.9.25
編集・発行　公益財団法人 福武教育文化振興財団
制作　株式会社吉備人
デザイン　久延フミカ（ヒラガナ企画）
印刷　研精堂印刷株式会社